

M 氏邸訪問記(2016.10.22)

1. はじめに

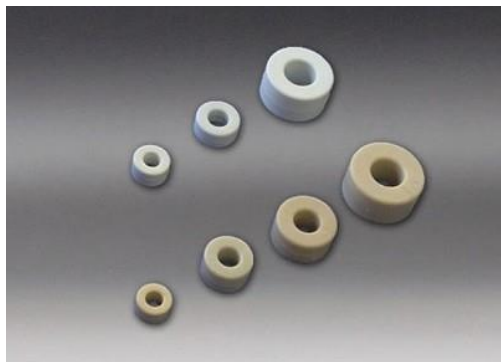
M 氏邸訪問はしばらく時間があきましたが、[前回の訪問](#)以降のチューニングの成果を確認させていただくことでO氏とともに訪問してきました。

2. M 氏邸のシステムの概要

M 氏邸のシステムは[前回の訪問](#)以降、大きな違いはありませんが、いろいろなチューニングを施されたとのことでした。また、ECI-50 という接点クリーナーで全接点を磨き直したということでした。



主なチューニングの内容は中村製作所の[アモルメットコア](#)によるチューニングや[Analog System Enhancer](#)によるアナログ再生系のバーニングを実施されたとのことでした。アモルメットコアは SACD/CD プレイヤーのアナログバランス出力ケーブルと電源ケーブルに使用されています。さらにアモルメットを搭載した電源ボックス [PLC-02](#) を追加されています。この電源ボックスからはアナログプレイヤー、プリアンプ、チャンネルデバイダー、低域駆動用アンプなどの電源を取っています。





メーカーの説明によれば、アモルメットはノイズ防止用チョークコイルのコアで、オーディオで有害な高周波数ノイズを除去するために有効とのこと。使用対象はデジタルプレーヤー、DACなどのRCAケーブル、スピーカーケーブル、ACアダプターのDC出力コード等での使用を想定されており、写真のようにコアの中心の穴にケーブルを通して使用するものです。

3. M氏邸のシステムの試聴経過

まずはチューニングの成果ということで、ピアノ曲のCDの再生から始めました。最初にベーゼンドルファー、ブリュートナー、ベツヒシュタインの順に聴いていき、ベーゼンドルファー、スタンウェイ、ベツヒシュタインの3台のピアノの競演のCDを聴いていきました。



はっきり言えることは、ピアノの機種による音の違いが鮮明に捉えられ、演奏技量も含めて好みも自信をもって言えることです。チューニングの成果としては、一音一音がくっきりとヴェールを剥いだように聴こえ、それが機種による音の違いを鮮明に捉えられるようになったことに繋がっているように思えます。



ついで同じ演奏家によるグラーフとベーゼンドルファーの演奏とプレイエルによる演奏も聴かせていただきましたが、先程と同様、年代物のグラーフはややフォルテピアノに似た音色が感じられ、プレイエルの味わいもよく分かります。

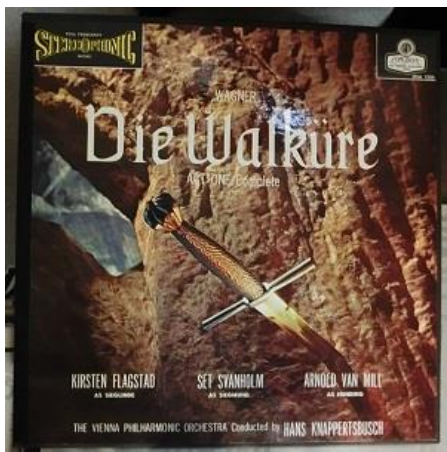
ここでアナログ再生に移り、O氏持参のリヒターのマタイ受難曲を聴かせていただき、アルヒーブの銜のない自然な録音によるテッパー、ヘフリガー、フィッシャー・デイスカウなどの懐かしい声を楽しませてもらいました。



M氏がちょっと趣向を変えましょうということでオスカー・ピーターソントリオとライナー／ウーンフィルのハンガリー舞曲を聴きましたが、ジャンルが違ってもピアノの音色が明晰で、管弦楽も音の分離がよくなっていました。



ついでM氏のワルキューレの初版と第3版（ジャケットは同じ）およびO氏持参のフランス版を聴きくらべましたが、初版は音の明晰さ、奥行き感や広がりでは他盤を寄せ付けず、O氏もしきりに感心しておられました。



この後、お馴染みの鬼太鼓座やシュタルケルのコダーイの盤の違いでチューニングの結果の追認をしてM氏邸を辞しました。

4. まとめ

M氏の丹念なチューニングの成果を、いろいろな銘盤の盤違い、楽器の機種の違いなども明確に聴き取れるようになったことで、確認することができました。アモルメットについてはオーディオ誌の記事や[ネット上の紹介](#)もあり、そのうち試してみようと思っています。

以上